

三河内曳山祭

三河内曳山祭は、江戸時代（1603年～1867年）から三河内で行われている、山車の行列を特徴とする毎年恒例の春の祭です。この祭りの始まりは、何世紀にもわたってこの地域の経済を支えてきた重要な製品である丹後ちりめんと関係しています。この祭は、倭文神社に祀られている織物の神を称えて、地元の繁栄を祝うことを目的としています。祭りはもともと秋に開催されていましたが、20世紀に春に開催されるようになり、現在は毎年5月3日と5月4日に開催されています。

三河内曳山祭のハイライトは、精巧に装飾された曳山です。この曳山は主にケヤキで作られ、漆塗りで、金が装飾されています。これらは全部で12台あり、そのうち4つは2階建てで高さは4メートルを超えます。これらは「山」と呼ばれます。行列の間、これらの曳山は町の通りを通過して、地方の神の精神が宿っているとされる神聖な物を運びます。また各曳山の裏には、金の糸で刺繍された大きな旗が掛けられています。すべての曳山は縄で引っ張られ、太鼓、笛、鈴の音がお祭りの音楽をあたりに奏でます。また小さな曳山の中には、楽器を演奏する子供たちを運ぶものもあります。この三河内曳山祭は、現在でも地域の文化遺産の重要な一部であり続けています。